大学教育学会（6月）報告

今回の総合テーマ ー評価時代を迎えた大学の在り方ー

都市教養学部理工学系・教授
伊與田　正彦

平成18年6月10日（土）・11日（日）の2日間、大学教育学会第28回大会が東海大学湘南校舎で開催された。本学からは、上野淳基礎教育センター長、舛本直文FD委員長代理、教務課長、その他本学関係者が出席して、本学のFD活動を紹介すると共に、他大学のFD活動状況をいろいろな角度から聞いたり学んだりする機会を得た。本報告ではその概略を紹介する。

大学教育学会は、学問的観点に立って「大学教育研究」に対する研究活動を展開している学会である。「FD（ファカルティ・ディベロップメント、大学教員の教育能力開発）」や「大学の自己評価」などに対して、学会が「課題研究」を設定し、それに対する研究成果を発表することが活動の中軸となっている。今回の学会では、第一日目に慶應大学政策・メディア研究科教授・高橋俊介教授による「ビジョンに基づく大学の組織マネジメント」と題した講演が行われ、大学の経営安定化に対する企業論理からの提言がなされた。また、「大学評価における認証評価機関の特徴を探る」というシンポジウムも開かれ、日本における4つの大学認証評価機関である大学基準協会・短期大学基準協会・大学評価･学位授与機構・日本高等教育評価機構の代表者が参加して、それぞれの共通点と特異点が話し合われた。このように大学教育学会は、多数の参加者が集まる大学教育の研究会であるが、昼食時には東海大学教養学部・梶井龍太郎教授の演出によるミニコンサートも開かれ、和やかな雰囲気であった。

本学会の二日目は「評価・FD」、「初年次教育」、「教授法」、「科学教育・e-learning」、「教育論・英語教育・キャリアサービス」、「学生の多様化と学習支援」という課題研究の発表があった。本学からの発表は　(1) 首都大学東京のFD1：全学共通科目」に対する学生の評価、および　(2) 首都大学東京のFD2：都市教養プログラムに対する学生の授業評価、という2件であった。これに関しては特に上野淳基礎教育センター長の発表した“都市教養プログラムに対する学生の授業評価”が都市教養プログラムという目新しい内容紹介であったためか、多数の質問を受けていた。課題研究に対する講演には、いろいろな資料が添えられており、各大学の作った本・冊子なども多数講演会場の入口に並べられていたので、それらを集めるだけでも楽しかった（ただし、面白い発表に関係した本などは急いで集めないと、100部程度の資料がすぐに無くなってしまう状況であったが…）。

舛本准教授の講演に対する質疑応答

上野 淳 基礎教育センター長の講演

第二日目の午後は「教養教育の評価に求められる内容評価」というシンポジウムが開かれた。教養教育は、現在実施されている大学単位での認証評価ではあまり問題視されていないが、平成14年2月に中央教育審議会が答申した「新しい時代における教養教育の在り方」に則って「創造に向かって行動することができる力」、「他者の立場に立って考えることができる想像力」、「世界の人々と外国語で的確に意思疎通を図る能力」、「科学技術についての正確な理解力や判断力」、「国語力」、「礼儀作法」の5項目にいかに取り組むかという議論がなされた。

今回の学会は、都心から離れた東海大学湘南校舎で開催されたが、多数の参加者が全国から集まって活発な議論がなされていた。特に今回は、名古屋大学、九州大学、三重大学などが高等教育センター活動の一環として幾つかの取り組みを紹介していたのが印象的であった。これは、FD活動が“教員の資質向上のみを求める”という極端なものではなく、“教員、学生、大学組織という三者によって教育の質の向上をはかる”という考えのもとに教育改善をはかるというものである。この考えの結果もっとも効果的な提案は“学生と教員が接する機会を増やす”というものであった。簡単なことであるが、大学教育ではなかなか実践されてないのであろう。

理工系の共通基礎科目を担当する私としては、“初年度教育”にも関心があるので、その講演会場をのぞいてみた。最初の幾つかは、外国における初年度教育の説明と日本のそれとの対応であった。外国の大学では、新入生が入学前に受ける教育のレベルが大きく異なるので、教育レベルを等しくするために、最初に単位にはならない基礎教育の授業を幾つか受けさせて、学生の知識を同程度にしてから大学での講義を受けさせていた（これは驚きであった）。

現在、我々理工学系教員は、本学の1・2年生を対象とした理工系共通基礎科目を教えるにあたって、高校で学生が履修してきた科目に大きな差があるために、どのレベルの学生を対象とした講義をすればよいのかという点でジレンマに陥っている。我々は、少し高いレベルの講義でも理解してくれる“良い学生”を対象とした授業をしたいと考えているが、それではほとんどの学生が理解できないので、講義のレベルを落として“教員としては不本意な授業を行っている”という現実である（これは、私自身の考えではないが、かなりの教員の意見を反映している）。

名古屋大学での初年度教育の取り組みでは「スタディティップス」が紹介されていた。“スタディティップス”とは、大学生の学習スキル向上・態度形成を目的とした学習ガイド・ノウハウ集の通称である。名古屋大学生の生活・学習に関するデータを経年比較して、近年の傾向を出している。それによると最近の傾向とは「授業出席率は急速に上昇しているのに対し、読書量や課外活動への参加度は漸減傾向にある」というものである。これは本学でも同じであるが、こうした学生の現状に応じた新しい形の学習支援が“スタディティップス”で検討されていた。また、アカデミックな意味でのオリエンテーション（方向づけ）も語られていた。

最後に、「教員が納得するFD活動の在り方」という講演を紹介する。これは多くの大学でFD活動が思ったほど進んでいない現状を解析したものであるが、FD活動を阻害する要因として次のものを挙げていた。

(1) 日本の大学にはFD活動の成果を評価するシステムがない（27）。
(2) 日本の大学の教員は、自分の授業がそれほどまずいとは思っていない（23）。
(3) 日本の大学にはFD活動を支持する文化的素地がない（15）。
(4) 日本の大学の教員は、研究を重視するあまり、教育に専念しない（13）。
(5) 日本の大学には、教育を重視する文化が醸成されていない（13）。
(6) 日本の大学では、FD活動に参画しても何のメリットもない（9）。
(7) FD活動を実施する組織が提案するプログラムが、教員のニーズと一致していない（6）。
(8) そもそも日本の大学にはFD活動が必要なほど、教育が不十分とは思えない（2）。

以上（1）－（8）の要因は、本学でも同じ状況にあると考えられる。これらを大別すると、“FD活動をしても評価されないので、しても無駄だ”という意見、“自分は授業がうまいと思っている”という意見、および“大学教員は教育よりも研究で勝負すべきだ”という意見に集約される。これは間違った意見ではないと内心思いつつも、やはり“これからの時代を勝ち抜く”ためには、我々の考えを変える時代を迎えていることを強く感じる。